

される。この静軒を迎えたのが武州大里郡胃山村の根岸友山である。明治9年(1876)日本で初めて歯科器械を輸入した瑞穂屋清水卯三郎は、友山の甥に当り、静軒に師事していた。

9. わが国における包帯法のあゆみ

日本大学松戸歯科大学 谷津 三雄
山野 博可 笹原 広重

外科治療に包帯法は欠かせない手技であるが、医心方にも又、鷹取秀次著「外療新明集」や「外療細壺」にも包帯法に関する特別の記載がない。

現在一般に理解しているような包帯の概念をもつに至ったのは江戸時代に入って蘭学が導入されてからである。特に大槻玄幹が Lorenz Heister (1683~1758) のドイツ外科書の蘭訳書の縛帯編を邦訳し「外科取功」と名づけ文化10年(1813)に刊行したのが包帯法に関する最初の成書と思われる。以後、救急法、戦傷外科、看護学などと並

行して発達していったと考えられる。これら包帯法のあゆみについて述べる。

10. 日講紀聞 外科各論にみられる 口腔外科的記載

日本大学松戸歯科大学 谷津 三雄
金子 賢司 鈴木 邦夫

本書は大阪病院教師エルメンスが講述した「外科各論」を原田俊三が口訳し、それを物部誠一郎が筆録、それを院長の高橋正純の検閲を得て明治12年に刊行された全巻の和本である。しかし、松尾耕三の序文と凡例の記は明治9年であることから出版まで3年間を要したと思われる。

その巻2に欠唇、巻3に顔面疾病、巻4に口唇疾病、歯牙疾病、顎骨疾病、巻5に舌疾病、口蓋疾病など多くの口腔外科的記載があるので、これらの内容につき述べて口腔外科史の一端としたい。